志賀直哉全集

第十巻

志賀直哉全集　第十卷
第七回配本（全十四卷・付別卷）

昭和四十八年十一月十九日　發行
定價　二千四百圓
著者　志賀直哉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 志賀直吉 1973

目次

明治三十七年……三
明治三十八年……一七一
明治四十年……二〇一
明治四十一年……二九九
明治四十三年……三二九
明治四十四年……四五七
明治四十五年・大正元年……五二七
大正二年……六六三
大正十一年……七三一
大正十二年……八七一

大正十三年……九二三
大正十五年……九二五
後　記……九七一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

明治三十七年——大正十五年

明治三十七年

〔二十一歳〕

何人も無斷之れを開く事を得ず

一月一日　金　晴

前の年罪少なかりしを感謝し、此年も亦然からん事を祈る。

此朝三時寢につき、朝は例の式、青山に母ト曾祖父母ト紅葉ト團十郎ト逝きたりし二人の友の墓に參る。

睦友會、三時有島邸を出で、二見にて寫眞し、向島の雲水、精じん料理、月、河の水、――――六人なり。

久本に吉花の太十と昇之助の野崎とを聞く、前者は先に聞きし事有り　評するまでの事ならず、昇之助の野崎は、いつもながら曲中の人、一つとして活動せざるはなく、お染とおみつ、一つは大所の御寮人様、一つは在所の女子、其間の會話、共に其性格を表白して餘すなく、久作と云ひ、婆と云ひ、少しのあぶなげなく、以て聽衆を優に同化せしむるに足る。吉花、若之助輩のくわだて及ばざ――。

一月二日　土　晴

八時半新橋を發す、同行三人、喜樂座、一番目は神靈矢口之渡なり、中幕の上は大杯觴酒戰强者、同下は太こ割り鎌倉權五郎、二番目は玆江戸小腕達引なり。一座は左團次、小團次、米藏、莚升　歌昇、荒次郎、升若、九團次等なり。一番目は此人々のものを前年明治座にて見し事有りしが一粒撰りの三人が舞臺幾度見ても惡しからず。中の上は此人のおはこの由なるが、筋も舞臺面も左したるものに非ず。中の下は矢の根五郎の變作なるべし、筋は兒戯に等しきも、無邪氣なる所頂上なり。太こを割つて出づる所、ユリセスが木馬の計を思はしめて妙なり。二番目は源太なる息子をして手一ぱいに働らかせしが、相當に見上げたり。大切の所作は小高の今様道成寺なりしが見殘して歸る。

演劇に有つては舞臺に現はるゝ者皆名優なる事能はず。淨瑠璃に有つては曲中の人物總て名優なる事を能ふ。

〈〔欄外〕此朝八時院長薨ず〉

一月三日　日　晴

前十時半田村來り後四時半頃歸る。

後五時頃平一の家に至り夜十二時頃歸る。良心につき語る、

月明の夜、
父は此日午后青森地方より歸る、
有島、は弟と淺蟲に向ふ由なり。
近衛院長昨日午前八時半薨ず
吾の學習院に入りてより此人最も永き院長なりき、

一月四日　月　晴

此朝十時頃より机に向ひ昇之助に與ふるの書を作り、夜に及び平一來り之れを寫し投函す。

一月五日　火　晴

午后三時頃より平一と小山來る。散歩して青山の團十郎と紅葉と定子(浪子)の墓に詣で。平一の家に至り、六時頃此所を出で久本に至る　七時十分過ぎなり。巴勝の鰻谷より聞く　これは嘗て此人のものを聞き事[ママ]ありしが、其時よりは餘程聞き上げたり、尤も終りまで語りたればなるべし。吉花の合邦は、邪魔するもの有りて氣毒なり、語り物の困難なる上に三味線の朝之助氣の無き人なればかわい相なり。
昇之助の柳は「樣子をとくと和田四郎云々」より「木やり」までをぬきたれば何んとなく食ひ足らぬ心地して殘念なりき。出來の可否は兎も角、柳は筋も高尙にて沈みしもの、なれば引き立たゝ[ママ]ぬは當然なれ

ども。木やりなど得云はれず輕妙なり。歸途有島の書生と遇ふ

此人の或人に聞きし話によれば、其人が昇之助に會ひて第一に感ぜし事は彼女が少しも藝人風の所なく後來優に人の師匠たるの品格有るものなりとの事にて年も僅かに十四五才なる由なり　吾は彼女に書を寄せて若しも彼女が豫想にたがひていやしき者ならんには如何に失望すべかりしを、寄書して翌日直ちに此事を聞いて豫想以上のものなりしは喜びに堪えざるなり。願くは此後ちとて世の誘惑に敗るゝ事なく我理想の藝術家として圓滿に發展せん事を祈る。

一月六日　水　晴

院長の葬式。目白―谷中。

夜一人にて久本に至る。巴勝の讐仇討、餞別の段にて、三人上戸はは[ママ]充分おかしみを聞かせたり、此人は全體を語り活かすの能なきも、むしろ端役を活かして、人を笑はすの技はたくみらし、いづれ圓滿なるものならず。吉花の白石嘶は先きにも聞きし事有り、中々にたくみなり。昇之助の寺子屋は常に益して面白く聞かれたり、寺子屋は劇にても四度見しものにて全體ほとんど明らかに我頭に入りし事とて劇の「ナレッヂ」より推して評すれば「どりやこちの子と近付にと」のあたりよりにて「ハテ扨、そなたは……」、「……死出三途の……」「……若君には替えられぬ……」又地にて「せまじきものは……」のあたり何とも云へずよし。睨付られ、「ヲ、怖や」の所、ふるへ聲にて云は劇にてせざる所なれど、之れはあながち此

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人の工風にもあらざるべけれど、自然なり。又松王の「何の是しきに」の前の笑はハーハ、ウーフ少し長過ぎる様思はる。「ム、こりや菅秀才の首討たは、まがひなし、相違なし」を、今少し重く肺かんより出づるが如く云つては如何。又千代の「得心なりやこそ……」のあたり充分なり。源藏の「につこりと笑ふて」を聞いての松王が泣笑ひは感服の外なし。

一月七日　木

田中と木下と東京座を見る。一番目兒來也後日物語、中の上、和田合戰女舞鶴。中の下、白石嘶。二番目神明惠和合取組。なり。

一番目は芝翫の出し物にて感心も出來ず　唯當座に似合はず道具よかりしは嬉し　評を省く。中の上は成駒と小高島屋の出しものにて、芝翫の板額は如何に見ても勇婦とは受けとれず。又、「跡に殘りし板額が、涙の顏をふり上て、エ、聞へぬぞや我夫……」のさわりの內頗る間のびの科有りしが此人に似合はぬ事なり　又ぼたんの市若は六法[ママ]の出と云ひ臺詞廻はしと云ひ彼の年少にしてよくも覺えしもの　少しのあぶなげなき、前興行の竹松と同じく上々吉の出來なり、殊に「扨は我身は主殺しの柄がらの平太が子なりとや……」のさわり輕妙なるものなり。只、切腹の時「なむあみだ佛と差添を拔より早くの……」の本文通りいそぎしはよかりしが其前白無垢をとく間少しく遲かりし爲め後ちにいそぐ所如何にもちよぼに追はれてあわてしが如く見えて、面白からず　衣服とく所今少し急ぐ方よからん。兎に角有望の少年なり。

此幕は猿之助、女寅共にお苦勞。中の下の揚屋は宗之助の出しものにて大車輪にて見せ。吾も思はず泣かされしが、何分にも「だゝあー。がーま。」「あかはらはたれ申さぬ」と云つたなまり。此劇又は此義太夫を聞かぬ人々には其會話のおかしさに折角の秋(ママ)たんも打ち消さるゝは甚だ損なり　少しなりと、此義太夫を聞きし人には此會話反へつて悲を益すものなるに……女寅は嘗ても此宮城野をせし人なれば遺憾なし。訥子の惣六は高島屋張り。二番目にては猿之助の辰五郎、一向いなせに見えず　彼の聲は何所までも葛西のせなあなり塩原多助なり。源之助は書下しの事とて申し分有るべき筈なし。勘五郎の、喜三郎は如何にも重みなし。舞鶴堂主人なり。訥子の四つ車は評する事もなし　團子の藤松は元氣なものなり　當人も面白くてならぬ所よく見え大向大受け、澤瀉屋ーなり　先づ劇評は之れに止め夫より久本に至る、吉花の御殿が少し殘り居しが評なし　舅之助の阿波鳴、八ツ目は二度目なるが何時聞いても惡しからず。殊更評するも野暮ながら「泣々別れ行く跡を見送り〳〵延上り」のあたり聽衆總て彼女が美聲につゝまれて一言なし。お弓歸つて「サア〳〵ちやつといつてたづねて〳〵〳〵〳〵〳〵」は目前其光景を吾人に表はすの力、或は天才の或者なるか

一月八日　金　晴

始業式に出席す、林博太郎氏の新任告達式有り。

田中邸による。

歸つて後ち、久本の太十も聞きたく、琴平の素行が太十、愛之助が御所三も聞きたく大に迷ひしが、土曜の晩の他は餘り行くまじと決心す。

夜、祖父、父、英子、直三、よし子等と佛敎のすご六をなす。常になく面白く家庭の暖か味は多少益す今日此頃誠に嬉しき傾向にこそ。

日本の戲曲的道德にありては其動機善なれば隨分の惡行をも犧牲なすを見る「鳴戸の十郎兵衞」「寺子屋の源藏」「忠臣講釋の重太郎」「御所三の辨慶」「和田、女舞鶴三の板額」「鰻谷のお妻」等總て然り。

巢林子は愛に付いて中々正確なる見解有りしが如く見らる。

一月九日　土　晴

先學期成績。國漢作甲乙丙西東論獨武數品平席なり
甲乙乙甲乙甲乙乙乙甲甲中乙七

午后平一來り夕食を終りて久本に行く

巴勝の八百屋の段は地を如何にもぞんざいに語るにより一向面白からず。吉花の忠四、は思ひしよりはよくしたり。

舜之助の堀川は二度目なれば一層に趣き多く、鳥邊山の如きは其文句を聞かんが爲めに得云はれぬ其節より注意力をそがれんの恐れを以て吾は其事實は少しも聞ざりしなり　殊に前の「あの面白さを見る時

は」に至つて醉はしめらる。又「くらがり紛れに材木が云々」「ナニヲ、祐筆、祐筆じやわい。」の如き滑稽遺憾なし。「そりや聞えませぬ」……「お詞無理とは思はねど」のお詞をおことわと云ふは何故なるか。此最も優美なる所とて成べく濁音を避けしものか。吾は春(去年)新越路のこれにて紋十郎の與次郎、玉造の？を見しこと有りければ先入故甚これを好む、猿廻しも上々吉。

〈〔欄外〕有島と小美山〔ママ〕來る〉

一月十日　日

午后平一來り共に新富に見る　一番目は扇富士蓬萊會我にて行きし時は丁度三幕目の鎌倉營中の場なり　之れは昨春神戸の大黑座にて我當　橘三郎、德三郎一座のものを見し事有りしが誠に面白からざる狂言なり　一口に評すれば又五郎の重忠は落付きとぼしく騷々しく例の癖で一寸した事で顏をしかめ上目づかひをすれば尙重みを失ふなり　然し熱心は充分なり

勝太郎の右幕下頼朝公は流石訥升　源之助等と一座して久しく在りしだけに此所等に來ては立派なものなり、幸之助の景季は吾は此人を見る事初めてなるが顏も美しく聲もたち有望なる人なるべし　癖は歩く時體を左右にゆすり何となく忍足に歩くが如く思はれて面白からず。中幕の是評判浮名讀賣卽ち野崎の事にて流石半二の傑作だけに、且つは元日昇之助のこれを聞きし吾には甚だ面白く見られたり　又五郎のおみつは紋十郎の人形より取りしかたなるが、在所の女子とは云へ餘り芝居をやりすぎたり(最初の內は)

後ち髪をきりてよりは如何にも同情するに足るものと見られたり　先出來の方なるべし　駒助の久作は中々よくはしたれど時々體が若者になるは困つたものなり　始終老人の心をぬかぬ樣せば充分なるもうけ役なれば一かどの讃詞を受くべきなり、左喜松のお染は無難なり　一座の花形なれども嘗て素顏も見しが新聞評に有が如く美しとは思はれず。梅次郎の久松も無難にてよくしたり、幸之助の下女およしは御苦勞、うまいものなり。勝太郎の油屋後家は評なし。四時少し過ぎ此所出で眼鏡のやぶにて食事し久本に行く、丁度巴京の太十なり、巴勝の娘の由なるが時々間違などし愛きやうなり。次の末菊は、語り物は忘れしが地は中々にやれど詞はめ茶なり。綾登司の玉三は、小役（ママ）なきものとて上出來なり。梅登の寺子屋　此人は初めてなれど聲は惡し。然し中々上手な所有り　吉花に少し强なるべし、青いきといきのあたりよりにて餘り面白からず、かど火〳〵〳〵の內第三番は地にて云ふ筈なるに此人詞にて云ひたり　如何なものか。巴勝の吃又はねむくてほとんど聞かざりし故評を省く、吉花の柳は昇之助の之れに比してはあだかも別曲の如く思はる　殊に和歌の浦には名所が御坐る以下に至つては其差亦甚しき哉、聲のなきは氣毒なり。然し此人としては上出來なるべし。昇之助の御所三は前にも聞き事（ママ）有るものにして此曲は吾は大に好む所にして、信夫がお役にさえ立ならばの所でアヽコレ〳〵母をさし置てつか〳〵と物言やんなと娘を叱り直ぐに侍從に向ひハイ〳〵此子云々と言譯する輕妙さ、其一轉の巧なるは感服の外なし　又「何某こそわしが父母」十八年以前と云ふ時甞ては十一ト云ひさし少し考へて八年と云ひ頃は夜も長月以下を早く云ひし故吾は其否を云々せしも此夜は十一八年とつゞけしは大に贊成なり。又ついくらがりの轉び寢にの一句を拔

きしは如何なる理なるか。國を出で、は天才との聲掛かれり。辨慶眞中にどつかと座し。以下の會話は今少し重くやつてほし

後ちの三十餘年のため涙のあたりとの調和の上始は氣を張りつめ殊更我慢して重々しくして後ち我慢しきれず母の恩にかこつけ充分に泣く所當代の武士氣質を表はして中々面白かるべきに。鳴く蟬よりも中〳〵にの所申分なし。

一月十一日　月

先月二十四日より聞きし淨瑠璃

舞之助。「小いそが原24、」「重の井子別25」「堀川26」「鳴門八27」「御所三29」「壺坂30」「野崎1、」「柳5、」「寺子屋6、」「鳴門八7、」「堀川9」「御所三10」12

吉花。「御所三24」「鈴ヶ森25」「太十26」「宿屋27」「白石嘶揚屋29」「安達三30」「太十1」「合邦5、」「白石嘶揚屋6」「御殿7、」「忠四9」「柳10」12

巴勝、「秋津島内25」「松右衞門逆櫓27」「鰻谷29」「鰻谷5」「躄、餞別6、」「八百屋9、」「吃又10」7

若之助、「寺子屋25」「白石嘶揚屋26、」「重の井子分れ27」「玉三29」4

綱枝、「小坂部館25」　綾登司「鳴門八25」「玉三10」　巴京「太十10」

梅登、「寺子屋10」1/40

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com